

雷除

〔武江年表^七〕此年間化○文 記事 文化の始より、淺草寺七月十日の四萬六千日參に、赤き蜀黍を雷除として商ふ事始る、

〔蜘蛛の糸卷追加〕雷除に赤もろこし虫の藥 青酸漿

淺草觀世音毎年七月十日を四萬六千日とて、參詣群集なす、此事昔はなかりしをと、古老いへり、さて又此日此山内にて、赤き唐もろこしを雷除として商ふ、俗子買はざるはなし、そもく赤き唐もろこしは、近き文化の始め何國に生せしにや、其以前はなかりし物なり、本草家栗本隨仙院に尋ねしかど、書物には見えす、近來變生の物なりといへり、されば文化年中よりの品物なるべし、雷除なりとは、何によるにや、

〔東都歲事記^二〕四月朔日、龜戶天滿宮雷神祭七日迄修行、本宮に別雷神意富加牟豆美神を祭り、雷除を祈る今日より八月晦日迄雷難除の守札を出す、

五月廿八日 白金土筆原雷電宮祭雷除の守札出す、三鉢坂北

〔夏山雜談^三〕桑原トイフ所ハムカシ管家ノシロシメシタル處チリ、延長ノ霹靂、其後度々雷ノ墮タリシ時、此桑原ニハ一度モヲチズ、雷ノ災ノナカリシトカヤ、コレニヨツテ、京中ノ兒女子、イカツチノナル時ハ、桑原々々トイヒテ、咒シタリトナリ、今ニイタリテ、カクイフコトナリ、

〔家屋雜考^五〕間雜 焚火之間圍爐裏 貴人の御座近く焚火の間を設くる事あり、○中大道寺友山が雷鳴論といふものに、甚雷の時、火を多くたけば雷火の災を免る、故なりといへり、

捉雷

〔日本書紀^{十四}〕七年七月丙子、天皇詔、少子部連螺贏曰、朕欲見三諸岳神之形、或云此山之神爲大物

坂神也、汝等力過人、自行捉來、螺贏答曰、試往捉之、乃登三諸岳、捉取大蛇、奉示天皇、天皇不齋戒、其雷虺

虺、目精赫赫、天皇畏蔽、目不見、却入殿中、使放於岳、仍改賜名爲雷、

〔日本靈異記^上〕捉雷緣第一